

2020年11月15日朝の礼拝メッセージ

「選択、そして決断」

ルツ記1：1－22

(導入)

私たちの日常、そして歩みには数えきれないほどの選択の時があります。安藤先生もおっしゃっていましたが、根拠がないものでも1日に9000回もの選択を人はするというものもあります。私も担当している教会の働きに、礼拝企画があります。この働きだけを見ても選択の嵐ですね。大まかな礼拝スケジュールは洪先生が決めてくださいますが、細かなことなどは、スタッフ、そして委員会メンバーで話し合い、選択し、決断して準備していきます。

また、私たちは今11月の半ばを過ごしています。もうすぐクリスマス、そして2021年も目前に迫ってきていて、来年のことも考え、また選択していく時期にあるのではないのでしょうか。

そんな私たち、今日は、ルツ記1章の御言葉から、色んな選択肢がある中で、私たちはどのような決断をし歩んでいったらいいのかを再確認していきたいと思います。聖書箇所は長いので、メッセージの中で共に見ていきたいと思います。

(本論)

①背景・状況確認

1章の中心的登場人物はナオミ、ルツ、オルパの女性3人です。まずは、彼女らの置かれている状況を共に確認しましょう。

ルツ1：1 (パワポ)

この1章1節、とてもあっさりとした淡々と情報が書かれていますが、ここから沢山の情報を読み取ることができます。

まず、「さばきつかさが治めていたころ」です。さばきつかさとは、士師記の士師のことでもあり、士師記の時代に、神様がイスラエルの民たちに与えてくださった神様の霊の臨んだ指導者であり、裁判官や祭司長、そして預言者のような役割のある者のことです。

なので、さばきつかさ、つまり士師が治めていた時代というのは、ナオミたちは士師記の時代に生きた人たちということです。

では、この士師記の時代はどんな時代だったのでしょうか？士師記の始めから終わりまで、これでもかというほど書いてあるのが、イスラエルの民たちの犯す罪、それに対する神様の懲らしめ・裁き、それによって出てくる民たちの苦しみに対する叫び、そこに士師による救いを与えて下さる主、大丈夫になるとまた罪を犯すイスラエルの民たちの歴史です。この悪循環の約400年もの歴史が書かれています。

ヨシュア 2：7-8、10-11 (パウポ)

ヨシュアや主のみわざを知っていた長老たちが生きていた時は、イスラエルの民は主に仕えていました。でも、ヨシュアも長老たちも死に、主を知らない、主のこれまでなされた御業も知らない新しい世代の民たちは、主の目に悪を行い、もろもろのバアルに仕え始めたとあります。

そして、士師記の一番最後の 21：25 (パウポ)

そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。

士師時代に生きていたイスラエルの民たちは、主を忘れ、主の御業、主の恵みを忘れ、他の神々を拝み、神様中心ではなく、自分を善悪の基準とし、自分中心に自分勝手に生きていた時代だったんですね。

こんな時代、神様からイスラエルの民たちが遠く離れた、罪にまみれた時代にナオミたちは生きていたんです。

では、次の情報はなんでしょうか。

ルツ 1：1 (パウポ)

次は、「この地に飢饉が起こった。」飢饉です。

Ⅱ列王記 8：1 (パウポ) を見てみましょう。

「主が」というのがポイントではないでしょうか？

また、飢饉は旧約聖書に沢山出てきます。創世記 12章ではアブラハムが、創世記 26章ではイサクが、創世記 41章からはヤコブやヨセフとその兄弟たちが、Ⅱサムエル記 21章ではダビデが、Ⅰ列王記 18章ではエリヤが、Ⅱ列王記 4章や6-8章ではエリシャと、いろいろな、沢山の信仰者たちは飢饉にあうんです。

でも、このことで苦しみますが、苦しみに終わることなく、信仰が練られ、その歩みは主の守り導き、助けを体験し、主を知るという恵みへとつながっていきます。

Ⅱサムエル記24：10－13

飢饉は、時に主が罪の裁き・罰としてくださるものであることもわかります。エレミヤ書を見ても、神様の裁きの3点セットとしてよく剣・飢饉・疫病とでてきます。

士師記にベツレヘム出身の人たちが罪を犯す内容も出てくるので、この時代ベツレヘムに住んでいたイスラエルの民たちも、めいめい自分の目に良いと思うことを行って生きていて、パンの家と呼ばれる、食べ物に困らないはずのベツレヘムも、神様から飢饉という罰を受けていたのかもしれませんが。詳細は書かれていないので分かりませんが、エリメレクとナオミがベツレヘムに住んでいた時飢饉にあいました。

次に見るのは、**ルツ1：1の後半（パワポ）**

「モアブ、そして滞在」です。

この状況で、エリメレクとナオミの前にあった選択、それは、「飢饉真っ最中で食べ物のないベツレヘムに留まって飢饉を乗り越えるか、それとも食べ物のあるモアブに一時避難して飢饉を逃れるか」でした。そして二人がした決断は、モアブに一時避難するというものでした。

1節で滞在と訳されている言葉のヘブル語「グール」は、一時的な滞在を指す言葉です。なので、移住ではなくあくまで一時的な避難。この時のエリメレクとナオミの決断は、ベツレヘムの飢饉が終わったら帰るというものだったでしょう。

ルツ記では、登場人物の名前の意味も大切になってきます。お父さんエリメレクの名前の意味は、「私の神は王である」という意味です。信仰告白のつまった名前です。士師記の時代の人たちの歩みとは真逆で、エリメレクは名前のごとく、主を第一としていた人だったのでないかと私は思います。

なので、一時避難とはいえ、モアブに行くかどうか苦渋の選択・決断だったのではないかなと思うんです。その理由はたくさんあります。

一つは、ベツレヘムを離れるということは、神様が与えてくださった約束の地から離れるということだったからです。

また二つ目は、モアブ人たちは、創世記19章29-37に書かれているように、アブラハムの甥ロトとその長女との間に生まれた子供の子孫たちの国ですが、この国の人たちはモアブの神々、豊穡神バアルや子供をいけにえとして捧げるケモシュなどを拝んでいて、モアブに留まるということは、偶像崇拜する人たちの中に住まなきゃいけないということだからです。

また、三つ目に、民数記 2 2 章以降モアブの王の子バラクがイスラエルを呪おうとしたことがあったからです。イスラエルにとってモアブは敵ともいえる国となりました。

四つ目の理由は、民数記 2 5 章を見ると、シティムにとどまったイスラエルの民たちが、モアブの娘たちと罪を犯し、2 万 4 千人もの人が主の罰で死にました。過去にモアブの女性たちによって罪を犯したことがあったからです。

また五つ目の理由に、申命記 2 3 : 3 の「モアブ人は主の集会に加わってはならない」という戒めがあったからです。

とても信仰的な決断の迫られる者だったと思います。でもエリメレクとナオミは、モアブに一時避難することを決断しました。なぜかというのは書かれてないので分かりませんが、やっぱり二人の息子を食べさせるためだったのではないかなと思います。

親である皆さんはこのことを一番よく理解できると思いますが、親は自分よりも子供のことを優先するものです。なので、モアブは信仰生活面ではとても厳しいところだけど、子どもに食べさせるものがある。子供たちの信仰生活は、私と妻で守っていこうと思い決断したかもしれません。そして、彼らはモアブの地に行くとどまります。

②ナオミに降りかかる試練と苦難

でもここからナオミに次々と試練と苦難が降りかかってきます。一つ目は、大黒柱であったエリメレクをナオミは失うというものです。家族、それも最愛の夫を失う苦しみ・悲しみ。教会でこれまで最愛の人を亡くされた方々を見てきましたが、その悲しみは言葉で表すことができないほどのものです。

このことだけでも十分辛く悲しいのに、二つ目の試練と苦しみがナオミを襲います。残された息子二人がモアブの女性を妻に迎えるんです。

エリメレクとナオミがモアブに行くにおいて悩んだと思う内容をさっきいいました。過去に、モアブの女性をきっかけにイスラエルの民たちは罪を犯し滅ぼされました。またモアブの女性を妻に迎えるということは、彼女たちの偶像崇拜がナオミたちの生活の中に入ってくるということでもあります。息子たちよ、なぜ？と思ったかもしれません。旦那を無くし、女手一つで育ててるけど、自分の力のいたらなさを痛感したかもしれません。

でも、ナオミへの試練・苦難はここで終わりではありません。なんと今度は愛する二人の息子までも失ってしまうんです。この息子たちのために思ってモアブに来たのに、その息子たちすらも失ってしまいます。モアブに来たこと自体が間違いだったのではと、旦那と

自分がくだした決断を何度も何度も悔いたかもしれません。13節の後半をご覧ください。「主の御手が私に下ったのですから」と言っています。また20-21節を見てください。

ルツ1：20-21（パワボ）

このように言っているからです。この苦しみは全部自分のせいだとナオミは思っているからです。

多くの試練・苦難を経験するナオミですが、その時ごとに選択が迫って来たと思います。

・旦那を失った時は、「モアブに残るべきか、それともベツレヘムに帰るべきか」という選択。でもまだベツレヘムは飢饉中で食べ物がなく、モアブに息子たちと残ることを決断したのではないかと思います。

・息子たちがモアブの女性を妻に迎えた時は、「息子たちの嫁を愛するか、それとも距離を置くか」という選択があったのではないかなと想像します。ナオミはどっちを決断したと皆さんは思いますか？この後ナオミは、この息子夫婦たちと10年間共に歩みますが、この10年間、私は、ナオミは嫁たちをととても愛し大切にしてきたと6節以降のナオミの心境の変化から考えます。

家族も財産も生きる希望も失い、自分が一番辛く絶望とも思えるとき、ナオミは主が自分の故郷ベツレヘムを顧みてくださっていることを知り、6節では、二人の嫁を連れて帰ろうとします。7節でも二人の嫁と一緒に今まで住んでいた場所を出てとあります。

でも、そんなナオミが8節以降で、二人の嫁に自分の家に帰るよう、まだ若いんだから、帰ってまた結婚して新たな人生を歩んで幸せになりなさいと、主が恵みを施してくださるようにと祝福を願い、彼女らを帰そうとします。

年よりのナオミが、一人で100kmほど離れている道を帰るのはとても辛い事です。途中で強盗に合うかもしれないですし、なによりも体力的に辛いですね。若い嫁二人と一緒にいたほうが何かと安心なはずです。でも、ナオミは自分のことよりも、ベツレヘムに帰ったあとの二人の嫁のことを心配したのではないのでしょうか？

ベツレヘムで敵国であるモアブの女性たち、しかもやもめの女性たちが生きていくのはとても辛い事です。女性という弱い立場だけでなく、モアブ人なので差別などもあるかもしれません。ナオミが活着している間はなんとかなっても、ナオミが死んだあとどうなるかわかりません。またまだ若いのに、モアブの女ということもあり、再婚できるかもわかりません。また、文化だけでなく、なんといっても宗教、信じている神様が違います。これらのことを心配し、ナオミは二人の嫁に帰りなさいと言ったと思います。

そして、9節の後半に、それを聞いた二人の嫁が声をあげて泣いたとあります。姑に愛されていなかったとしたら、ここで泣くことはないですよ？ごまあみろと言いながらすぐに立ち去ったかもしれません。でもここには、泣いたとあります。この二人の涙が、この10年間ナオミにたくさん愛され、とても大切にされたということを表しているのでしょうか。

ルツ1：13 (パワボ)

13節「だからといって、夫を持たないままでいるというのですか。娘たちよ、それはいけません。それは、あなたたちよりも、私にとってとても辛いことです。」本当の母のように、彼女たちの幸せを心から願うナオミです。

この言葉を受けて、ルツとオルパに選択が迫ってきます。「自分の家に帰るか、それともナオミとベツレヘムに行くか」言い換えるなら、安定があって主のいない歩みを選ぶか、それとも試練があるけど、主がおられる歩みを選ぶかという選択。

ルツ1：15 (パワボ)

オルパは安定があって主のいない元の歩みに戻ることを決断しました。自分の家族がいて、民がいて、神々がいて、安定のある生活に帰っていきました。

そして、ナオミはルツにもオルパと同じようにあなたも帰りなさいと言います。ルツはどっちを決断したのでしょうか？ルツは、試練があるけど、主がおられる歩みに進むことを決断します。ナオミについて行っても生活の保証、差別されない保証、再婚し子を産める保証だってありません。ナオミだって自分よりも先に死ぬでしょう。試練しか浮かばないような道。でもルツはナオミについて行くことをすごい信仰告白をもって決断します。

ルツ1：16－17 (パワボ)

このように信仰告白をします。ルツはナオミの内に一体何を見て、ナオミについて行くことを決断したのでしょうか？16節「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神」ナオミの内に主なる神様を見てです。

でもこの神様がナオミにされたことはなんだったのでしょうか？旦那をとり、息子2人をとり去られました。祝福してくださってエリメレクも息子たちも生きていて幸せに生きているのを見たら信じるができると思いますが、起こったのはその真逆のことです。ナオミは主なる神様を信じていたのに次々と苦しみにあい、すべてを失っていきました。

皆さんがノンクリスチャンだとして、知り合いのクリスチャンが苦しみばかりにあい、上手くいくことなんて全くないように見えたら、そのクリスチャンの信じる神様を信じてみようと思いませんか？その状況だけを見たら、とてもじゃないけど思えないですよ。それどころかその人と距離を置きますよね。

でも、ルツはナオミに起こる悲惨な出来事だけを見たんじゃないで、絶望せずには、あきらめずにはいられないようなその時のナオミの選択、そして決断に目を向けます。その決断の中に、どんなに辛い試練や苦難・困難があっても、旦那を失っても、息子たちを失っても変わらないナオミの主への信仰、自分たちへの愛を見出します。

ナオミを通して、ルツは、想像も絶する苦難の中で必要なものをナオミは確かに持っている。このナオミの信じる主は、どんなに絶望的な状況に置かれても、その人が主を、主の恵みを選択・決断していけるよう助け導いてくださる方であること、自分の信じていた神とは違うことを発見していくんです。

そして、ナオミを通して主を知ったルツも、ナオミにならない主を、主の恵みを決断していきます。その決断がナオミに一生ついて行き、助け、愛し、大切にするとこのものでした。

(結論)

最近またコロナ感染者が世界的に増えてきました。でも私たちの周りにはコロナという困難以外にも、家庭は家庭の、職場は職場の、教会は教会のというように、ありとあらゆる場所で様々な困難・試練と思える物事があります。そればかりでなく、霊的困難・試練もあるでしょう。

そんな時、皆さんはどのような選択、そして決断をしているのでしょうか？私たちの生きているこの世は、利害関係で人と付き合うことが多くあります。困難な中にあればあるほど損得を考えて人と付き合ってしまう誘惑があります。

また、主よりも身近な助けとなる人や具体的な助け・解決策を選択・決断してしまいそうになります。でもルツは、ナオミを通して主を知り、ナオミを自分に安定を与えることのできる人か、得な人かとは見ず、今大変な中にあるか、一人にしても大丈夫か、助けが必要かというふうに見ました。

ルツは、ナオミからの愛の中に、また、どんなに苦しい状況に置かれても崩れない主を土台とした歩み、前に進むことをやめないナオミを通して、キーポイントである主を見出していきました。

I 列王記 8 : 33 - 43には、ソロモンの祈りが書かれています。時間の関係上読めませんが、後ほど読んでいただけたらと思います。ソロモンの祈りの内容から、私たちに苦難や試練がある理由が分かります。

それは、私たちが主の約束の地、主へと帰らせるため。罪から立ちかえらせるため、良い

道を教えるため、私たちが生き続ける間いつも主を恐れるようにするため、またまだ神様を知らない人たち、あらゆる人たちが主の御名を知り、私たちと同じように主を恐れ、主の御名が呼び求められ、ほめたたえられるべきことを知るためです。

私たちも、どんな苦難試練の中に置かれても、この選択・決断のキーポイントである「主」を見出していきたいと思います。そして、主の恵みの道を選択・決断し、一步一步歩んできていきたいと思います。

コロナの苦難の中にいる私たち。またアモス8：11（パウポ）とあるように、私たちが今生きているこの時代も、パンに飢える、水に渴く飢饉ではなく、主のことばを聞くことの飢饉の真っただ中かもしれません。そんな霊的飢饉・霊的苦難の中にあって、私たちはどのように主を証し、信仰の決断をし歩んでいったらいいのでしょうか？

私たちが成功することを通してでしょうか？病が回復することを通してでしょうか？問題なんてなく安定して歩むことを通してでしょうか？

今日の御言葉は、私たちキリスト者が、乗り越えられなさそうな苦難や試練にあっても、何度も倒れそうになっても、いや倒れても、私たちのイエスキリストという土台が崩れず、主の恵みにすすがる時、人たちは私たちの内におられる主を見出します。

主が、これからも私たちに迫ってくる沢山の選択において、私たちが主を、主の恵みを選択し、そして決断できるように導いてくださるよう心から祈ります。そして、その決断を通して、私たちの周りの人が私たちの内に主を見出し、あなたの神は私の神という告白が溢れるように切に祈ります。

お祈りします。